

【成 果】

（１）学級経営について

普段の学級経営も含めて研究の一つであるということを、意識できたことが大きな成果の一つである。研究授業でも、子どもたちが安心して様子や、自分の居場所があると感じていることが伝わってきた。これは、春から冬にかけて３回、自分の経営案をもとにグループで情報交換をしてきたことが、よい方向で表れたと思っています。

（２）普段の授業での意識

研究授業だけでなく、普段の授業で、子どもの見とりやそれに応じた支援を考えるようになった。常にアンテナをはり、一人ひとりの子どもの好奇心や必要な支援を考えることが、日常的に行われるようになった。

（３）単元構想について

単元構想をつくることによって、深く教材分析するようになった。ただし、つくったものを再度見直ししながら、修正を加える必要はある。

【課 題】

（１）「切実な問題」について

昨年同様、成果としては、「切実な問題」を入り口にして、見とり、発問、板書等、様々なことを授業者が深く考える必要があることを、今まで以上に共通理解できたことがあげられる。問題に対して、一人ひとりに必要な支援を考えるようになったことは大きな成果である一方、果たして「切実な問題」となっていたかどうかについては、疑問が残る。その原因として、「見とり」が不十分であったことが考えられる。昨年の課題にあった、「教材分析」について、今年は、「なぜ、そのような授業を構想したのか」が明確だった授業が多かった。これは、単元構想に多くの時間を割くことによって、授業者自身のねらいも明確になっていったからだと思われる。ただし、教科や単元の特性、さらには地域の特性や子どもの背景をふまえた「見とり」を行わなければ、「本気で考える問題」が生まれないことは、昨年度同様、大きな課題となった。

（２）「見とり」について

（１）の「切実な問題」についてと「見とり」については、切り離せないものである。「見とる方法」は様々であり、見とりが生きる支援や指導の方法も様々である。絶対確実なものは何かとは言いきれないが、その方法について、もっと知る必要があるだろう。

「子どもが言ったから」ということを聞きますが、「子どもが言ったこと＝子どもの切実な問題」とは限らない。もちろん、ある子どもの言ったことが周囲の心にひびいて、みんなの切実な問題になる場合もある。子どもの初期衝動（ただの好奇心）が、必ず知的的好奇心になっていくのか。「ただの好奇心 → 知的的好奇心 → 子どもの切実な問題」という過程は、子どもの願いや思考を育てる過程と言える。この段階を教師は見とっているのか。さらに、一人ひとりが現在どのような思考になっているのかを、見とっているのが課題である。

【今後の研究について】

３年目ということで、教師間の共通理解も深まってきたと同時に、さらなる課題が明確になってきた。来年度もこれまでの研究を継続することで、ひびき合う子どもたちの姿を追究していきたい。そのために、次のような点を重点に、研究を進めていくこととする。

- ①「切実な問題」とは何かについて、全員で共通認識を持てるような提案をしたうえで、各々が単元構想をつくる。
- ②これまで以上に、授業を見て分析する力を養うために、授業研究方法について研究していく。

来年度は発表の年ということもあり、集大成となるよう明確な共通の目的をもつ教師集団となるよう、さらなる努力していく。